

気持ちに寄り添う保護者支援とは

講師

大倉 得史 京都大学大学院准教授

1. 子育て支援の必要性

そもそも子育て支援はなぜ必要なのでしょう
か。

〈図1〉をご覧ください。この図は育てるとい
う文化的な営みが、世代から世代へと受け継がれ、
再生産されていくこと示し、これを世代間リサイ
クルと言います。私たちは目の前の子どもにかつ
ての自分の姿を見ます（子どもへの同一化）。ま
た子どもは目の前の大人に未来の自分を見ます
（親への同一化）。子どもと大人はお互いに映し
あう2枚の鏡のような関係にあります。さらに親
の子育ての仕方には親の親からどう育てられた
かということが入り込んでくる一方、親の親たち
は、かつて子育てに奮闘していた自分の姿を若い
親に重ねます。このように3世代（4世代）が絡
み合いながら生活している、これが人間というも
のの在り方です。

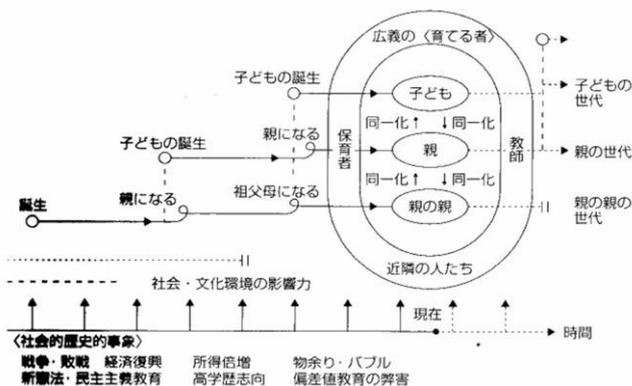


図1 世代間リサイクル

鯨岡峻『保育・主体として育てる営み』より

当たり前のことですが、親は子どもが産まれた
から急に親になれるわけではありません。ある意
味、生まれた時から「育てる者」になる準備が始
まります。どういう親になるかは、様々な子ども
時代の経験が積み重なることで決まってきます。
また、実際に子どもを育てる事によって、社会的
に成熟し、よりしっかりとした「育てる者」にな

っていきます。このように「育てられる者」から
「育てる者」へと一生涯かけてゆっくりと時間を
かけて進んでいくわけです。重要なことは、人は
一人では親になれないということです。祖父母の
世代、親戚、地域の人々に支えられ、初めて本当
の意味での親となっていくのですが、現代におい
ては、次の世代に育てるとい営みが引き継がれ
にくくなり、この世代間リサイクルが難しい社会
となっています。

その大きな要因は、少子化、核家族化、個人主
義の強まりがあります。昔は古い考え方から女性
はお家のために産めよ増やせよと言われていま
した。しかし、今や個人というものが家や共同体
から独立したものであり、結婚をするのか、子ど
もを産むのかを選択する権利があるという考え
方が一般的です。男女平等の思想の広がりや女性
の社会進出など、多様な生き方や価値観が当たり
前となっています。晩婚化や少子化は自然な流れ
であり、歴史上の進歩です。しかしながら、その
反面、少子化が育てるといことを難しくしてい
ます。若い人は成人を迎えると親元を離れ、基本
的に配偶者と二人で子育てをします。家族や近所
の助けなしに独力で子育てしていかねばなりま
せん。昔であれば近所の子育てをしているお母さ
んから見よう見まねで赤ちゃんへの接し方を学
んでいました。また昔は小さな子の面倒を大きな
子がみるということはよくありましたが、今や、
乳幼児に関わった経験がない、世話の仕方を見
たことすらないという人が増加しています。第一子
が生まれる前に赤ちゃんの世話をしたことがな
いという人が4人に3人というデータもありま
す。このように、今の親は経験がないままにイン
ターネットや育児書を頼りに不安いっぱい子
育てに向かっています。また、地域との結びつき
が弱くなり、家や地域共同体から独立した個人と

して生きようとし、近所と没交渉でいたいという風潮があります。気軽に悩みを親や近所の人に尋ねることもできず、外出時に子どもを預けることも難しいという親子が増えています。

最新科学の知見として、ヒトは生物学的に一人で子育てできないそうです。妊娠期に大量に分泌されていたエストロゲンが出産を経て急速に落ち込むと、不安や孤立感が高まるようになってきていて、その結果、女性は自然と周りのサポートを求めようになります。そういった生物学的仕組みがヒトを共同育児に向かわせ、誰かが働いている時には、誰かが育児をするという効率のよい子育てを可能にしてきました。それが人類社会の発展を導いてきたとも言えます。人類が何百万年前からしてきたのは共同育児なので、ここ数十年の「核家族化」は生物学的に無理があります。一人での子育ては不安ばかりが高まり、子どもと二人だけで過ごさざるを得ない生活の中、抑うつ、イライラから思わず手をあげてしまうことに繋がるわけです。今更、核家族から大家族になることは無理がありますので、社会全体で子育てをしていく仕組みが必要となります。

さらに、このような難しさに加えて、個人主義の強まり、自己決定による自己実現を大切にするという考えが強まっています。しかし、本来一個の生命が誕生し、自分とは別個の主体として育っていく過程には、自分の「思いどおり」にはならない、どうにもならない側面がつきまといます。若い時に自己充実を目指して生きてきた「自分中心」の態度から、言わば「子ども中心」の態度へと生活スタイルを変え、そこに積極的な喜びを見出していくということ（コペルニクスの転回）が求められます。これは自己決定、自己実現が強調され過ぎている現代において、多くの人にとってかなり難しいことです。大きな責任を背負う子育てより、自由を謳歌したいと思う若い人もいますし、自分のやり方について他者から口出しされるのに慣れていない、傷つきやすい人が増えています。まとめると、最近の親は自分の子育ての仕方に自信は持てないし不安でいっぱいであるが、人から「それは違う」などと言われて指導されるのもまっぴらという、難しいメンタリティを持った

人がいるということです。

現代は「育てる」という営みが次の世代に受け継がれにくくなっている社会です。若い人たちは子育ての負担感ばかりが大きく感じられ、「子育ての仕方は分からない、誰をどう頼ったら良いのかも分からない、半ば頼りたくもない」という不安と孤独の中で手探りの子育てをしています。その中で若い親を支える保育者の役割は重要です。保育所保育指針にも「一人一人の保護者の状況やその意向を理解、受容し、それぞれの親子関係や家庭生活等に配慮しながら様々な機会をとらえ、適切に援助すること」と規定され、第6章全部が「保護者に対する支援」に割かれています。また幼稚園教育要領、幼保連携型認定こども園教育・保育要領にも類似の規定があります。このように世代間リサイクルを支え、親御さんが成熟した「育てる者」になっていくプロセスを支えるという社会の命運を握る役割が保育者に課せられているのです。これが、なぜ子育て支援をしなければならないかという理由です。

2. 子育て支援のための関わりの基本

子育て支援といえば育児の知識やその方法がわからない保護者に対して、経験豊かな保育者がアドバイスをすることをイメージしがちですが、その時に子育てに自信はないが、いろいろと言われるのは好きではないという人に一方的に「こうすればいいのよ」と伝えると、否定や押し付けと感じられてしまうことがあります。知識不足だけでなく、愚痴や不平不満をこぼせる相手も身近におらず、大人同士の会話ができない負担感、孤独感が大きくあります。また保育者のアドバイスと同様の内容はインターネットや育児書で知っているが、それを実践できない難しい状況がある場合もあります。保護者はアドバイス以上にコミュニケーションを求めていることもあるのです。よって、まずは保護者がどんな状況に置かれ、どんな思いを抱えているのかを引き出し、その状況を受け止めていくことに心を砕いていただきたいです。励ます前にその人の困り感を聞き出すことがとても大切です。その個別的な悩み（すぐには解決策が見えないもの）が見えてきたとき、そ

こからがスタートです。自然と「それは困りましたね」「そんな中でいろいろ工夫されてきたんですね」などの言葉が出てくると思いますが、それによって保護者は理解してもらえたと感じ、解決策が見えなくてもそれだけで大きな救いになります。保育者自身、共感が湧くように保護者の話を引き出していくのがポイントです。その際、二つの方向への想像力を広げながら話を聞きます。まず一つ目は現在のその人を取り巻く状況です。夫や親戚との関係、近所付き合い、日常生活は何をして過ごしているのかなどを知り、その保護者の閉塞感や困り感の強さを推し量ります。二つ目はその人の過去の経験です。かつて親からどう育てられたか、子ども時代、青年時代をどう過ごしたか、就職の経験など、想像を広げます。その人の過去の経験を知ると、今の負担感の意味が一段深く感じられます。

まとめると、その人が今置かれている環境や対人的状況、そしてその人の過去の経験を想像する、言い換えれば、その人を取り巻く空間、時間を広げながら、その中で現在その人がどの位置にあるのかを把握することが深い理解に繋がります。ただし、プライバシーの侵害にあたるような聞き方ではなく、節度をもって「想像」することが大事です。想像することによって、その人への感受性が豊かになるのです。

また、こうした相談の中では保育者の側にアイデアが湧くこともあり、それを提案することが必要になるときもあります。提案はアドバイスではありません。提案とは、大変さを共に味わう中で、ふと湧いたアイデアを自分と相手が横並びになりその間にそっと置くことです。アドバイスとの違いは、それを採用するか否かは相手次第だということです。提案してみるけれど相手がもう一つ乗ってこない、そこで新たな困難に気づき、また一緒に考えていく。このような事を重ねながら今の大変な状況を少しでも和らげるために、二人で試行錯誤し合っているという構図を作り上げることがポイントです。仮にアイデアを思いつかずとも、寄り添ってくれる伴走者がいることが大きな支えになります。

対応の仕方は千差万別ですが、多くのケースに

適応可能な指針が一つあります。それは保護者の目が子どもの心に向くように誘うということです。子どもの「行動」が思いどおりにいかないという「問題」で頭が一杯になり、その「問題」の背後で子どもがどのような気持ちでいるか、どんな体験をしているかにまで意識が回らないという保護者が多くいます。こうした時に保護者と一緒に「子どもさんは一体どんな気持ちなのでしょうね」と考えることは、子どもの思いを感じ取り、それを受け止めるという子育ての基本に立ち返らせる効果があります。ただし、まずは保護者の心配、悩みを受け止めることが前提です。決して「あなたはあなたで大変なのだろうけど、子どもがかわいそうじゃない」という言い方にならないようにして下さい。大変さや困り感を共に味わい、どうすれば良いかを考えていく中で「もしかしたら子どもさんはこんな気持ちでこんな行動をしているのかもしれない、だとしたらこんな方法もあるかも」とアイデアを出し合っていくことで、保護者が我が子の気持ちに気づき、関わりを修正することがあります。「問題」だと思っていたことがたいしたことではないと思えるようになることもあります。保護者が我が子を可愛いと思えるには子どもの心が分かるということが大切です。子どもの心に目を向け、我が子を愛おしく思う保護者の愛情が活性化するようにサポートしていくことが大事だと思います。

クラス担任にもぜひ心掛けて欲しいこととして、立ち話、連絡ノート、園便りなどの中で子どもの思いや気持ちの動きが保護者によく見える伝え方を工夫してください。これが繰り返されることで子どもの何処に注目すべきなのかわかり、自然と我が子の心の育ちに保護者の目が向くようになります。特に「お父さんやお母さんのことが大好き」という子どもの強い思いが感じられるエピソードを是非丁寧に伝えてください。

3. 子育て支援拠点や園庭開放での保護者支援

エピソード①「その玩具、貸してあげなさい」M保育士

<背景>

私の保育園の子育て支援は、0歳から3歳までの子どもたちを対象にして、週に3日、保育園の一室と園庭の一部を開放するか

たちで行われているが、最近では0歳児の利用者が急に増えてきている。

室内では、年齢に合った玩具で遊べるよう、いろいろな玩具を用意している。絵本と一緒に読む親子、一緒に電車を走らせて遊ぶ親子と様々だが、その一方で、親子と一緒に遊ぶというよりも、どちらかという子どもが遊んでいるのを横目で見て親同士でおしゃべりしたり、保育士が子どもの相手をしているあいだ携帯でメールなどをしているお母さん方が増えてきた印象がある。

外遊びでは、子ども同士で遊ばせておしゃべりを楽しんでいるお母さんたちが多く、子どもが砂遊びを始めると「砂を触るのがいや」「汚れるからいや」というお母さんもいるが、最初はそうであっても、子どもと一緒に砂遊びをすることで少しずつ砂に慣れ、砂遊びが楽しいと思えるようになったというお母さんもいる。そういうお母さんに会おうと、保育士としてほっとする気持ちになる。

何かの機会にお母さんと1対1で話し合ってみると、ほとんどの人が孤立感と不安感を強く持ち、例外なく日々の子育てに疲労感を背負っていることが分かる。そのような親の思いをどのように受け止めて子育て支援を行っていけばよいのか、担当の保育士として日々、悩むところである。

エピソードの中心は、子育て支援の場にしばしば顔を見せるSちゃん（1歳7か月）とお母さん。お母さんはこの半年のうちに顔なじみの友だちもたくさんでき、お互いにメールのやりとりをしたり、子育て支援の場が開かれない日は、そうした友だちと約束をして、お互い子連れで遊びに行くことも増えているらしい。

子育て支援の場に早くやって来て、他の友だちがまだ来ていない間は、お母さんとSちゃんだけで1対1で遊ぶ姿が見られるが、お母さんの知り合いがだんだん増えてくると、お母さんはお母さん同士の話に夢中になり、Sちゃんに目が向かなくなってしまう。

Sちゃんは室内や室外をあちこち移動して、好きなおもちゃを見つけては、じっくりと遊ぶことができるようになってきた。お母さんが友だちとの話に夢中になっていても、一人で自分のやりたい遊びを楽しんでいる。

<エピソード>

室内でSちゃんが玩具で遊んでいると、Tちゃん（3歳2か月）が側にやってきて横から手を出しその玩具をとろうとした。けれどもSちゃんはまだその玩具で遊びたくて、「いやー」と言っているとられまいと抵抗する。お母さんはSちゃんのそんな思いには気付かず、「お友だちに貸してあげなさい、使いたんだって、Sちゃんはこっちの玩具で遊んだらいいから」と違う玩具をSちゃんに渡し、Sちゃんが使っていた玩具をとってTちゃんに渡してSちゃんに我慢をさせようとした。Sちゃんは納得がいかに床に突っ伏して泣き、一生懸命に嫌だという気持ちを訴えている。

その姿を見てお母さんは「それはSちゃんの玩具じゃないの、保育園の玩具だよ、お友だちがこれで遊びたいって言うてるの」と少し強めの声をかけるが、Sちゃんは泣きやまない。お母さんは困ったなあ、どうしようという表情をみせたものの、それ以上Sちゃんにかかわらず、お母さん同士のおしゃべりに戻ってしまった。

そこで私がSちゃんに「あの玩具でもっと遊びたかったのね」と声をかけると、Sちゃんは私を見て一瞬泣きやんだ。私はSちゃんを抱き上げて、「もうちょっとあの玩具で遊びたかったね」ともう一度Sちゃんの気持ちを代弁すると、深くうなずく。そして私は「お友だちにこの玩具と換えてもらおうか？」と声をかけ、

「Sちゃんはまだその玩具で遊びたかったんだって、この玩具と交換してくれない？」と相手の子に頼むと、相手の子はSちゃんが自分よりも幼いと思ったためか、「いいよ」と換えてくれた。換えてもらったSちゃんは、ちょっぴり嬉しそうにして、またその玩具で遊びはじめた。

お母さんがおしゃべりの輪から離れてSちゃんのところによってきたので、私はSちゃんが遊んでいるおもちゃを無理矢理とりあげてしまうのではなく、Sちゃんがまだこの玩具で遊びたいという気持ちをまず受け止めてあげてほしいこと、相手のTちゃんには「Sちゃんがまだこのおもちゃで遊びたいから、もう少し待っててね」とSちゃんの気持ちを伝えてほしいことをお母さんに伝えた。お母さんは「無理に譲らなくてもいいってことですね」とうなずいたが、私の真意は十分に伝わっていないなあと感じた。

<考察>
お母さんは、Sちゃんの月齢も大きくなり、いろいろな力がついてくる中で、子育てがしんどいという気持ちが以前より緩和されてきているように思う。けれども、仲良くなった他のお母さんたちとおしゃべりが楽しくて、Sちゃんに目が向かなくなってしまうことがしばしばあるのも事実だし、子どもの気持ちをしっかり受け止める前に、自分の気持ちに添って子どもを動かそうとする姿が目につくのも事実である。

しかしながら、この子育て支援の場にSちゃんと一緒にやって来れば、安心してお母さん同士でたくさんお話ができること、それによって子育てからくるストレスを発散できること、そしていろいろなお母さんたちの対応から学ぶことができること、等々、たくさんのメリットが得られる。それがこの子育て支援のよいところだと思う。お母さんたちがこの場を求めてやってきたときに、「ここにきてよかった」「ここがあって本当によかった」と感じてもらえるような支援の場にしていきたいと思う。

鯨岡峻・鯨岡和子『エピソード記述で保育を描く』より

このエピソードにあるように、地域の親子への居場所の提供は、大切な子育て支援事業だといえます。内閣府の国民生活白書によると、子育てで一番負担に感じていることは、自分の時間が持たないことです。特に専業主婦の方に強く、一時預かりなどの社会資源や祖父母、親戚などの力も借りられない場合、子どもと24時間二人きりという生活に母親は参ってしまいます。ですから、地域子育て支援拠点事業や園庭開放にきて、子どもと少しでも距離をとれる時間を持てること、ママ友を作って、一緒に遊びに行けることは非常に大きな支援です。会話に夢中になっている若い母親に眉をひそめる保育者もいるかもしれませんが、今はそれだけリラックスしているんだ、それだけ育児のストレスが溜まっているんだと見るゆとりが必要です。もちろん、保育者が目を離さなければならぬ時は「危なくないように見てあげてくださいね」と声をかけたり、子どもと遊ぶとい

う発想がなかった母親に対して、保育者が遊ぶ楽しさに気付くように働きかけたりすることも大切です。

初めて来た親子には柔らかく、温かく挨拶をし、ゆっくり過ごせるようにしばらく様子を見守ります。性急に関係を作ろうとして近づき過ぎるとかえって緊張し、しんどくなる人もいます。そこで様子を見ているといろいろ見えてくるものがあり、こちらの見立てを伝えてみると、保護者が子育ての大変さを語り「分かってもらえた」という安心感を得ることもあります。またタイミングをとらえ、相談事がないか聞いてみると、自分たちのことを気にかけてもらえていると感じます。周りの親子と繋ぐことも有効で、自分と同じような親子が利用しているという安心感が生まれまます。このように信頼関係を少しずつ作り上げていくプロセスそのものが子育て支援になるのです。園庭開放という物理的空間があるだけでなく、このような人と人との関係があるのが本当の意味での「居場所」です。

このエピソードでは、まず他の母親と仲良くなりリラックスして過ごしてもらおうという支援の第一段階は達成されています。ただ母親の側に子どもの気持ちを受け止めようという姿勢が弱く、そこが変わってくると、この子の育ちがさらに充実し、親子関係も良くなるだろうという支援の第二段階が見えています。しかし「子どもの気持ちを受け止めて」という保育者のメッセージが「無理に譲らなくていいんですね」と解釈されました。ここは、いきなり「こうしてあげてね」ではなく、まずは「さっき困った顔してたけど、最近Sちゃんに少し困ったなと思うことあるの?」と相手の気持ちを引き出していくと結果が少し違ったかもしれません。相手の思いを受け止めてから次へと誘っていくのは相手が子どもでも大人でも変わらないのです。

エピソード②「Aはどうしてそんなにいじわるなの!」

「保育士

<背景>

Aちゃん(女児、2歳3ヶ月)は、父母との3人家族である。父親の転勤により3月末に関東から引っ越してきた。母親自身も関東出身のため京都には知り合いがなく、京都にも長くて2年の居住になる予定とのことである。関東にいた頃、母は仕事を持っ

ていたため、Aちゃんは保育経験もあり、「お友達と遊びたがるので、保健センターでいただいたチラシを見て来ました」と初日はわざわざ電車に乗っての来園だった。当園は家から遠かったので、地域の園庭開放の一覧表を渡し、家の近くに児童館があること、他にもいろいろな支援の場があることを伝えた。

初日から1ヶ月程、2週間に1回程の来園であった。その間色々なところに行かれたようだが、児童館に行っても関東弁であることからその場に馴染めなかったり、リトミックに参加しても、“できる子”であるはずのAちゃんが周りの雰囲気によって圧倒されて入らなかったりしたことから、今は週2回程、当園に自転車で40分かけて来られている。

Aちゃんに対しては自分の望む姿へ近づけようと、降園時のあいさつ、絵本を借りた時の「ありがとう」など、厳しくしつけようとしている様子が見える。

<エピソード>

その日は、在園児の母親が講師を務める消しゴムはんこづくりの日であった。6組の親子が参加されたが、カッターを使用するため、保護者はパイプイスと高さのある机で講習を受け、子どもたちはボランティアのお母さんと私の二人で見守りつつ遊ばせていた。

Aちゃんがなかなか朝起きられなかったということで、開始時刻より15分ほど遅れてAちゃん親子が来園した。講師のお母さんから「大丈夫。今始めたばかりだから…」と励まされながら、お母さんは仲間に加わった。

しばらくすると、少し離れたままごとコーナーで、先にフライパンのおもちゃで遊んでいたBちゃんと後から来たAちゃん、フライパンの取り合いになった。嫌がるBちゃんから無理やり大声をあげて取り上げようとするAちゃんに対して、母親が慌てて走ってきて「やめなさい! Aはどうしてそんなにいじわるなの!」と大声で叱った。

母親が無理やり取り上げようとしても、Aちゃんはフライパンからなかなか手を離そうとしないので、私は二人の間に入って「Bちゃんは、今フライパンを使っているんやね。Aちゃんも使いたいんやね」と二人の思いを代弁して、落ち着かせようとした。「Bちゃんがフライパンでいっぱい遊んだら、Aちゃんに貸してあげようか」と言うと、Bちゃんはしばらく遊んだ後で、Aちゃんにフライパンを貸して、自分はお鍋に食材を入れて、遊び始めた。

Aちゃんの母親は、Bちゃんの母親に対して「横取りして、すいません」と謝った。Bちゃんの母親は「うちの子は、執着心がないタイプで、それはそれで悩みなんですよ」と言って、この場を収めてくれた。

講師は年中児のCちゃんのお母さんで、1歳頃から当園の遊びの場に参加し、私とは思いが通じ合える間柄だったので、「Cちゃんは2歳頃、どうでしたか?」と話題を投げかけてみると、「あの頃はどこに行ってもおもちゃの取り合いで本当に疲れてしまいました」と言ってくれた。他の母親も「自我の芽生えて言われるけど、どう子どもと付き合ったらいいのか、わからなかったです」などの意見を出してくれた。

Aちゃんの母親が「何歳くらいから収まりましたか?」と質問すると、他の母親から「言葉で伝えられるようになったらかなり落ち着いてきました」、「『貸して』『ちょうだい』などのわかりやすい言葉を教えるようにしました」とのアドバイスが出て、Aちゃんの母親は少しほっとした表情をしていた。

母親たちがそんな話をしているそばで、子どもたちはそれぞれが自分の好きな遊びをしていたが、Bちゃんが薄いソフトブロックの上でピョンピョンと跳び始めると、それを見たAちゃんや他の子どもも笑いながらいっしょに跳んで遊びだした。私もいっしょになって「うさぎさんみたいやね」と両手を耳にして「ピョンピョンピョン、ピョンピョンピョン」と笑いながら遊ぶと、子どもたちも何度も跳んで遊んだ。

子どもたちが笑顔でいっしょにうさぎになって、跳んで遊んでいることが周囲の大人の笑顔につながり、お母さんたちの消しゴムはんこもなかなかの出来栄えだったこともあり、その場は満足感と温かい雰囲気包まれた。

<考察>

Aちゃんの母親は関東に住んでいるとき、公務員として資格を活かし、やりがいのある仕事をしていたことを後日語ってくれた。父親の転職の通知が来たとき、母親は一緒に関西に来るかどうかが真剣に迷ったが、父親が大好きなAちゃんの思いを大切にしようと、仕事を辞める決断をした。しかし、親戚や友だちもなく子育てのみの毎日はどうしても子どもにのみ目がいつてしまう。子育てを完璧にこなそうとして、厳しい言葉や表情になったのだと思う。Aちゃんがかわいい、だからしっかりと育てたいという母親の思いが、時には厳しくなってしまうということをまず保育士自身がしっかりと受け止め、子育ての悩みを聞いたり、時には子育ての失敗談などを話し、関わってきた。また、Aちゃんの他児への優しさや、他児や保育士との会話の楽しさなどを母親に話して、Aちゃんのかわいさを伝えるようにし、Aちゃんの思いを母親が受けとめることができるようにと願いながら関わってきた。

母親はできれば資格を活かして就労したいと希望している。どのような勤務体制になるかはまだ思案中らしいが、家の近くの保育園を紹介したり、当園の一時保育を案内するなどして子育てを応援していきたい。

また今後も保護者同士、子ども同士の関わり合いが深められるような遊びの場を設け、保護者の思い、子どもの思いを受け止めることのできる子育て支援に取り組んでいきたい。

先程述べたように、時間軸を想像しながらこのエピソードをみると、見知らぬ土地での緊張感の中、元々きっちりした性格である母親が、ルールやけじめを守れない我が子に苛立ち、厳しい躰けに傾いていることがうかがわれます。ある意味、エピソード①と同じく、子どもの気持ちを受け止めるゆとりがなく大人主導の関わり（現代の一つの典型）になっています。ここで、まずT保育士は自宅近くの支援の場を提供することで、この親子が少しでも生活しやすくなるように配慮しました。地域の親子が利用できる施設の一覧をパンフレットにしたり、近隣の地図を自前で作成し園庭開放で配布したりすると、親子の行動の選択肢が広がり、地域のサポート体制も感じられます。また保育者はAちゃんとBちゃんのおもちゃの取り合いに際し、「ここはこうしようね」と解決

策を提示するのではなく、まずはそれぞれの子どもの気持ちを引き出し、受け止めています。これは保育の基本です。子どもは思いを分かってもらえるとすっと落ち着き、自分からどうすればよいかを考え出すこともあります。このように、保育者がさりげなくモデルとなるような関わりを見せるのも支援となります。

その後、申し訳なさそうにするAちゃんの母親に対して、保育者の意図を汲んでくれるCちゃんの母親に話を向けたことで、各保護者からAちゃんの母親を支えるような言葉が次々と出てきます。Aちゃんの母親の大変さに共感しようとし、受け止めようとする雰囲気がこの場に浸透していることが感じられます。このように新規の親子を常連の親子が受け止めてくれることが出てくると、さらに懐の深い支援に繋がります。具体的なアドバイスをもらいながら、我が子の自我主張に気づき、その後の関わりを見通しを得ることができたのです。このように保育者が一人ひとりの思いを受け止めることを大事にすると、その場を利用する全ての人にその態度が浸透していきます。また、ここではAちゃんの母親を助けるだけでなく、支えた側の母親たちも元気になったと思います。人の感情は不思議で、物と違って与えれば与えるほど感情も膨らみ、人を支えることは、自分自身のエンパワメントとなり皆が元気になるのです。この親子が子育て支援の場に40分もかけて来るのは、ここに厚みのある温かい雰囲気があるからでしょう。子育て支援の第1目標である人と人とのつながりのある「居場所作り」をこれからも続けてほしいと思います。

4. 個別の困り感に寄り添う

エピソード③「みんなそう言ってくれはるんですけど…」

S保育士

<背景>

当園で一時保育を始めて4年。預けたい理由は「同年齢の子どもと遊ばせたい」「美容院や病院に行きたい」といったものから、「仕事をしたい」「ハンディを持っているので健常児と過ごさせてあげたい」「母親の入院」といった切羽詰まったものまで、様々である。また、受け入れ後、子どもの発達や保護者のかかわりが気になることも多々ある。

K君（男児、現在2歳3か月）は1歳8か月の時に一時保育の登録をした。当時、お母さんは弟のT君（当時9か月・男児）を

抱きK君をベビーカーに乗せて来園。見るからに大変そうだった。

お母さんが寝入っているT君を抱きながら二人分の登録書類を書いている間、私がK君と遊んで待つことにする。用意したカエルのおもちゃを跳ばしたり並べたり積んだりして見せると、笑顔は見せないもののK君は“もう一回”とばかりに私にカエルを渡す。しばらく遊ぶと、人見知りもなくK君は私の手を引いて職員室から出たいとアピールしたので一緒に園内を探索する。

お母さんが書類を書き終える頃を見計らって、私が「Kちゃん、お母さんのとこに帰ろうか？」と手を出して誘うと、K君は一旦私の顔を見て嫌がることもなく手をつないで職員室に戻った。この間、K君から言葉や声は聞かれず表情も乏しかったので少し気にはなった。

<エピソード>

登録の際、お母さんは遠慮がちに受け答えされていたが、帰り際になって「怒ってばかりなんです。Kはやって欲しくないことばかりして……怒ってばかりではあかんって分かってるんやけど……」と吐露された。「たとえばどんなことですか？」私は具体的に聞けば一緒に何か気づくこともあろうかと尋ねてみた。「ご飯のとき、お茶をわざとひっくり返したり……」と答えられたので「わざと？」と訊くと、「こっちを見てしているので」とお母さん。お母さんの気持ちを少しでも和ませたくて、「わざとですね」とお母さんに賛同するように笑って言う。K君の思いを探ろうと「お母さんの気を引きたいのかなあ…」と言うと、「年子なのでそれはあるかもしれませんが」とお母さん。「まだまだ甘えたい時期ですものね。でもお母さんが大変ですよ？年子は小さいうちは大変やけど大きくなったら逆に楽って聞きますけど」と言う、「みんなそう言ってくれるんですけど……」と“今までにも同じことを言われたことがあるけれど、私は今どうにかして欲しいのだ！”というお母さんの気持ちがひしひしと伝わり、「ねー、今が大変なんやもんね」と受け止めるしかなかった。

「怒らないほうがいいですよ」と、お母さんは再度保育士としての私に確かめるように聞かれた。「うーん、危ないこととかお母さんが「これは……」と思わはることは、言わはったらいと思えますよ」と答えると、少しほっとした表情をされた。続けて「保育園でもしたらあかんことは小さくても「メンメ」とか「ブー」とか「アーアー」って分かり易い言葉で言うてますねえ。くり返しくり返しですけど……それと、「やめて」ばかりやったらこっちもしんどいから、やめて欲しいことじゃなくてして欲しいことに言いかえるのも一つの方法かも」と言う、お母さんはすぐに「「ひっくり返さないで」じゃなくて「コップ置いてね」とか？」と肯定的な言い方を考え付かれた。私が感心して「お母さん上手じゃないですか。そんな感じ！」と言うと「こんなんでいいんですか？」とにっこりされた。生真面目そうなお母さんだけに「～しなれば」という思いが強くなって、逆にまたしんどい思いをされるのでは、とも感じたので、「いつもいつもじゃなくても5回に1回くらいでも……」と付け加えると「家でもやってみます」と表情もやわらかに帰られた。

一時保育にはK君と弟の二人とも登録されたが、結局入園までの計5回とも預けられたのはK君だけだった。このことからお母さんのK君に対する悩みの深さや疲れが伺えた。

4月に入園。弟のT君は0歳児、K君は1才児クラスに入った。園生活に慣れてきた頃から、K君なりの理由があるものの友だちを咄嗟に噛んだり押したりすることが増えてきた。またすぐに保育室から出て行ったりするなど、落ち着かない様子だった。お母

さんは弟の担任に「Kは可愛くない」と悩みを打ち明けられた。また、K君の担任との話の中では、自分の子育ての仕方が上手くないからだと自分を責められることもあった。

両方の担任から親子の様子を聞く中で、年子のせいだけではなくK君の育てにくさを担任も私も感じたので、5月中旬に主任、副主任二人（うち一人は私）、1歳児担任で相談し、保育園連盟が行っている発達相談があることをお母さんに話してみる。すると「是非、受けてみたい」と前向きに考えられ、7月にK君が巡回相談で発達テストを受けた後日、父母そろって発達相談に来られた。

その際、発達心理の先生からは、発達の遅れはないがADHDの傾向があり、選択的注意の難しさや感覚の過敏さがあること、父母ともに子ども時代は似たようなところがあったとのことで、K君の気持ちはよく分るはずなので、どうしてもらえれば落ち着いたかを考えながら子育てしていくといいこと、K君が物を投げたら怒るのではなく、知らんふりしたり場面を変えたりすると良いことなど、説明があった。

その後、休みの日にお父さんが弟をみて、お母さんがK君との時間を持つなど、家族の協力も得ながらK君を大切に関わっておられた。

また、あるとき連絡帳に“T(弟)を噛もうとしたのですが、一度噛みかけたのをやめて、「イヤー！」と言った場面がありました。最後は叩いてしまったのですが、少し気持ちは抑えられたのかもしれませんが。最近、噛んだら「嫌な時は「イヤー！」って言うんだよ」と伝えるようにしていて、少しは伝わったのかなと思いました。気のせいかもしれませんが……”と、家での様子を書かれていたので嬉しく思い、その日のお迎え時に、「K君の行動でなく気持ちに目を向けられたお母さん素敵です」と伝えた。「そんなことないです」と謙遜するお母さんに「今日ね、園でも友達におもちゃを持って行かれそうになったとき、一瞬噛みそうになったけどやめて、自分から「イヤー！」って言って返してもらったんですよ。お母さんがK君の気持ち分かってあげてはるの、K君に届いてますよ」と話すと「それやったら嬉しいですよ」と喜ばれた。

そんなお母さんを見て、「今までK君を育てはるの一筋縄ではいかへんかったでしょうね」と私が思わず言うと、「そうなんです。おっぱいもあんまり飲まへんかったし、夜も寝えへんかったし……」と赤ちゃんの頃から育てにくさを感じられていたことを話してくださった。「そうやったんですね……頑張ってきはったんやね……これからも嬉しかったり大変やったりの繰り返しやろうけど、しんどい時は担任でも私にでも言うて下さいね。愚痴でも聞きますから」と笑いかけると、「ありがとうございます」と笑い返して下さった。

<考察>

一時保育の登録の際、私は「お母さんの気を引きたいのかなあ」とK君が年子ゆえにお母さんに甘えられず葛藤していることで、お母さんがしんどい思いをされているのでは、と勝手に憶測をしてお母さんと話していた。結果的に、それだけでは説明できないK君の育てにくさが見えてきて、発達相談につながった。発達相談後、K君の心の育ちをお母さんと喜び合え、それまでのお母さんの大変さに心から寄り添えたからこそ、赤ちゃんの頃からしんどかったことを話して頂けたように思う。

気持ちに寄り添うためには、子ども、そしてお母さんの状況や思いを知ってその身になることが大事だと思う。知るためには思

い込みや決めつけを取っ払って話を聴くことに尽きる。特に一時保育や子育てひろばに来られる方は胸の内をすぐには話じぶらいたろうが、それでもお母さんの言葉の端々からその内面を伺い、気持ちに寄り添うことはできるはずである。今回は「みんなそう言ってくれるんですけど……」というお母さんの言葉によって、自分が安易に気休めの言葉をかけてしまっていたことに気づかされた。

今回、発達相談を受けたことで、“自分の子育てがまずいので”と自分を責めることもあったお母さんの気持ちが少し楽になったのではないだろうか。担任だけ、保育園だけで抱え込まないことも大切なことであると思う。そのためにも日頃から親子のエピソードを職員間で共有することをこれからも園の基盤にしていきたい。

このエピソードを読むときに、まず発達検査や発達相談に繋ぐことだけが支援ではないということに注意してください。子どもの気になるところをしっかりと整理し、保護者と共有していくことが大事です。「問題行動」の要因が、家庭での生活や親の関わり、園での保育者の対応や保育の形態にある場合があります。家庭と連携し、これまでの関わり方を見直してみる、それでも変化が見られない時に初めて「障がい」を意識するのが正しい順序です。したがって、S保育士が最初の段階でK君が寂しい思いをしているのかもしれないという見立てをしたのは、むしろ妥当な見方だと言えます。どれほど感受性が高くても、初対面から相手の状況や体験世界を把握することは不可能です。最後の場面で母親が大変だった育児について語っていますが、ここに至るまでに、保護者と試行錯誤しながら共に歩んでいくということ（関係の歴史）が大切なのです。保育士が障がいをいきなり疑うのではなく、まず生活や対人関係の中に原因を探り、母親の思いを受け止める中で一緒に考えていく、そのための細やかな配慮が繰り返されています。また、最後の場面でも「K君の行動でなく気持ちに目を向けられたお母さん素敵です」と、子どもの心の動きに目を向けた母親を認めています。このように子どもの気持ちの動きに気付けるように誘うことで、保護者の我が子への愛情も一段と深いものになります。

また、言うまでもなくこうしたケースに対しては一定の知識や専門機関との連携も必要になります。発達的な課題が明らかになった場合、どういった関わりやサポートができるかを、専門機関と話し合える関係性を構築しておくことが必要で

す。

エピソード④「アイコンタクト、きらり」 I 保育士

<背景>

子育て支援拠点事業の中で、昨年度より当区の保健センターと連携を持ち、家庭訪問事業を本格的に行っている。私が現在、訪問している家庭は7件で、学区担当の保健師から直接依頼を受けるケースと、1歳半健診の時、発達心理士から直接依頼を受けるケースを担当している。子育ての中で、子どもの成長発達での不安や、直ぐに相談できる人が近くにいないことへの不安など、お母さんの不安が高く見守りを必要とされているケースと、お母さんがメンタル面での見守りが必要で、育児支援のチームとして、当区保健師、子ども支援センター相談員、ヘルパー、保育士が連携しながら行っているケースがある。

Aちゃん（女児、6か月）は、父母との三人家族。お母さんは産後、メンタル面での状況が悪化し、保健師からの依頼を受け、保育士、ヘルパーの訪問支援が始まった。

初回は、保健師、ヘルパー、保育士が同行訪問を行った。Aちゃんは「かわいいね」とほほ笑む大人三人の顔を次々と見ながら、にっこりとほほ笑んでくれた。お母さんは少し緊張された様子で、保健師の問いかけに言葉少なく、とつとつ答えておられた。その中で、「保育士からは、離乳食や遊びについて聞けますよ」との保健師の言葉がけに「離乳食のことを詳しく聞きたい」と静かに話された。

室内は閉め切れ、きれいに整頓されているが、母子での外出はできない状況が続いていた。お母さんと保健師と相談し、2週間に一回の訪問となる。

<エピソード>

初回訪問以後、お母さんが一番気にされていた本児の離乳食について、話をお聞きする。お母さんは、「Aちゃんのためにきっちり進めていきたいと思っているが、今は、自分で作ることもできなくて」と悩んでおられる様子だった。お母さんが少し先を見通しながら、離乳食を安心して進めていけるように、お母さんと相談しながらAちゃん専用の離乳食表を1か月分、作成する。また、ヘルパー、保健師と連携を密に取り合いながら、ヘルパーが作り置きしている本児用の冷凍の離乳食で進めていくことになった。お母さんも安心された様子だった。

ある日の訪問時、お母さんはいつもより表情が硬く、訪問した私を気づかおうとしてくれながらも、表情がつかれない状況になっておられた。そして、Aちゃんの側にうずくまるように座られていた。Aちゃんは、「Aちゃん」と名前を呼びかける私の顔を『あー！おばちゃん』と言うように、前回より以上に表情豊かに笑い返してくれた。

お母さんはそんなAちゃんをじっと見つめながら、「Aちゃんに母乳をあげたいが薬（メンタル面）を飲まない方がいいですか？夜寝る前に少し吸うぐらいは大丈夫ですか」「離乳食も思うように進まないんです」と母乳と離乳食のことをずっと悩まれておられたのか、次々と矢継ぎ早に尋ねられた。

私が離乳食表を本児用に作ったことで、お母さんに『そうしなければ』という思いを募らせていることを後悔した。私が動揺し、お母さんを不安にさせてはいけないと思い、表情を整えながら、離乳食表は気にせず進めていけるよう、言葉を選びながら、お母さんにお話した。しかし、母乳と薬については、どう答えたら

よいのか、必死で考えたが、「悩まれますよね。お母さんの悩む気持ちはわかります」としか言えなかった。

Aちゃんは、「どうしよう」と思っている私の顔とお母さんの顔を交互に見ながら、笑いを浮かべようとし、不安そうな表情になったように感じた。そして、お母さんが、Aちゃんをじっと見つめながら、「元気な頃にできたことができないんです。元気な頃に戻りたい」と絞り出すように話された。その心の叫びを聞きながら、私は、うなずいて、お母さんの背中をさすることしかできなかつた。そしてAちゃんを抱きしめた。

その後の訪問より、Aちゃんとのスキンシップをしっかりと持ちながら、見つめ合う時間をたっぷり取るようにしていった。お母さんとも相談し、週一回の訪問を行うようにした。訪問を重ねるたびに、私を見るAちゃんの表情が和らかくなり、泣く、笑う、ぐずるといろいろな表現で気持ちを伝えてくれるようになってきた。

この頃より、Aちゃんは私と遊んでいる時、「あはっはっ」と大きな声で笑い、その後、必ず、側に座ってくれているお母さんに、キラキラの笑顔アイコンタクトを送るようになってきた。お母さんはその笑顔を見つめながら、一生懸命笑い返そうとするが、笑えないことがとても辛そうだった。

Aちゃんがお母さんに笑顔でアイコンタクトを送っている時、私はAちゃんをしっかりと見つめ、『いっばいの気持ちを伝えているAちゃんは素敵』という思いを込めて、「お母さん、見てくれるね」とそつと言葉を添えるようにした。

Aちゃん（9か月）との信頼関係が少しずつできてくる中で、夜泣きで心身共に疲れているお母さんに、横になってもらうよう声をかける。その繰り返しの中で、お母さんが、隣室で寝てもよいかと訊いてくださり、そうしてもらおう。お母さんは、Aちゃんに『行ってくるね』というまなざしを送りながら、「お願いします」とその場を離れようとする時、Aちゃんは「あっ！」という表情で見送っていた。Aちゃんは二人だけの時間の中で、いろいろな表情を見せてくれ、お互いの性格も少しわかってきているような気もした。

ある日、Aちゃんと共に出迎えてくれたお母さんは、少し笑顔で、「Aちゃんの好きな先生来てくれたで、大好きね」と言ってくださった。Aちゃんはそれを聞きながら、『えー？大好きというほどでもないで』という表情で私を見ていたのがとてもかわいかった。「お母さんありがとう。うれしいわ」と答えながら、『Aちゃんが大好きな人だから、預けて大丈夫』と一生懸命、自分に言い聞かせようとしているお母さんの気持ちに感謝した。

お母さんに少しの時間横になっていただき、Aちゃんと一緒に遊ぶ訪問を繰り返していたある日、お母さんはとても晴れやかな笑顔で出迎えてくれた。体調に回復が見られ、元気を取り戻せてきていることを輝く笑顔で話してくださった。また、できることが増えたAちゃん（10か月）に父母ともに驚いたエピソードなど、家族三人の楽しい様子を初めて話してくれた。そして、Aちゃんの成長をお母さんと二人で喜びあった。その様子を見ながら、Aちゃんは人さし指でおもちゃを細やかにくるくると回した。「Aちゃん、くるくる回すの上手やね」私が拍手すると、Aちゃんの笑顔がきらりと光り、直ぐにお母さんにアイコンタクトを送った。その瞬間、見つめ合うAちゃんとお母さんの笑顔がキラキラと輝いた。そして、Aちゃんは満面の笑みで、見守っていた私にニヤリとアイコンタクトを送ってくれながら、お母さんの膝に両手をつけて、とっても嬉しそうにつかまり立ちをしながら、胸の中に

抱かれた。

<考察>

支援者として、お母さんとAちゃんをどのように支えていったらよいのか、懸命に考え取り組んできたが、お母さんの深い悩みに、一つ一つの支援の薄っぺらさを知らされる日が続いた。そして、お母さんの悩みにどう答えれば、お母さんが楽な気持ちになれるかを必死で考え、言葉にした。しかし、私がお母さんを感じるように感じた瞬間、私はお母さんの気持ちを受け止めきれないことに気づかされた。

自分の無力さを感じるたびに、励ましてくれたのは、Aちゃんの笑顔だった。そしてその笑顔に主体はお母さんでもあるが、Aちゃんであることを教えられた。今まで、保育士として大切に思ってきた「子どもの思いに気づき、大切にすること」という原点に立ち返らせてくれた。お母さんが、元気になりたかったのは、Aちゃんにしてあげたいことが、いっぱいあったから。今思うと、お母さんの質問はAちゃんに関わるものばかりだった。そして、お母さんが一番望んでいたことは、Aちゃんと遊べない自分の代わりに、遊びながら、温かいまなざしで包んでほしいということだったことに気づいた。

現象面だけにとらわれ、整えようとするのではなく、大切なのは、お母さんと子どもの今の気持ちに気づくこと。そして、その気づきをしっかりと振り返り、母子に返していけるよう、心を澄まして心の声を聞き、全身で母子の気持ちを感じていきたい。今後、お母さんの病状の変化にも寄り添っていけるよう、関係機関との連携を深めながら、Aちゃんとお母さんの気持ちに気づいていけるよう、静かな心と熱いまなざしで見守っていきたい。

このエピソードは、支援するばかりが支援者の役割ではなく、保護者からの気遣いをありがたく受け取り、感謝の気持ちを表明することも支援につながるということを物語っています。お互いに支え合う対等な人間関係の中で、保護者の複雑な感情に深いレベルで応答していくこと、それがこの親子の大きな支えとなっていることがうかがわれます。対等な人間関係の持つエンパワメントの力は、ときに支援・被支援関係よりも大きなものになりうるのです。

子育て支援というのは、保護者と深い情緒的交流をしながら、現代社会において育児をする大変さを共に味わい、対処を考え、我が子に対する保護者の愛情がより強いものになるように、またそれが望ましい形で実現されるように支援することなのです。

共同機構研修会第2回

平成28年5月18日

於：京都市子育て支援総合センターこどもみらい館